

弥生時代

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

弥生時代は、米作りを主な生業とし、青銅や鉄などの金属器を使用した時代といわれています。京都に花開いた弥生時代の遺跡の様子を、時間を追って見てみることにします。

さて、稲作や金属器を用いる文化は、大陸から朝鮮半島の南部を通過して北部九州の一角にもたらされました。やがて、北部九州から出発した弥生文化は、この京都の地にも到達しました。その頃の様子はまだおぼろげにしかわかっていませんが、新来の人々とこの地にいた人々との交流の一端がうかがえる遺跡に、伏見区の下鳥羽遺跡があります(写真1)。

この遺跡は、京都に最も早く稲作がもたらされたムラの一つです。1987年の調査で、縄文土器の伝統を受け継ぐ土器と、北部九州の稲作文化のもとで生まれた弥生土器(遠賀川式土器)が、同じ穴の中から発見されました(写真2)。



写真1 下鳥羽遺跡(北から)

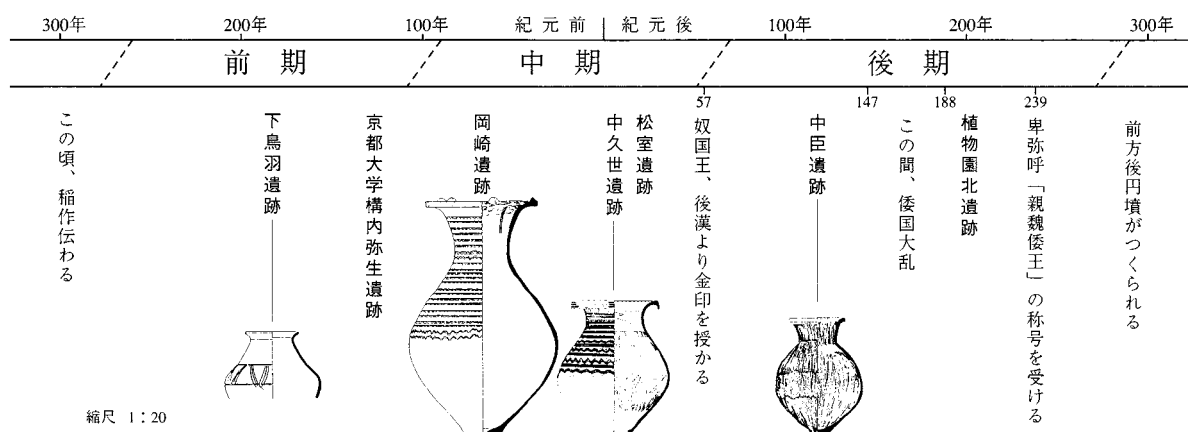
蛇行している溝の西側で、写真2の土器が入った穴を発見した。1987年調査。

異なった文化のもとで生まれた土器が同じ穴から出土した事実は、この地にいた人々と新来の人々との関わりを持ったことを示します。この出会いは、単に「もの」のやり取りにとどまらず、情報の交換やかなり緊密な交流があったことがうかがわれます。これは、稲作

を行なう「弥生ムラ」の8割近いムラが、縄文時代から引き続いて営まれたことからわかります。このようにして京都の弥生時代の幕が開きました。

これらの遺跡(ムラ)は、桂川や鴨川など、市内を流れる主要な川に注ぎ込む、中小の河川に面し

略年表



て、いずれも水田経営に適した湿地にのぞむ自然の高みに営まれています。この頃の水田の跡は、左京区の京都大学構内の遺跡で発見されています。

前期の終わりから中期にかけて稲作文化は、京都の地にしっかりと根をはります。その頃の暮らしの一端を、桂川右岸にある南区の中久世遺跡を例にとり、のぞいてみることにしましょう。

人々は、川の近くの高みにいくつかのたてあな竪穴住居などから成り立つムラをつくり、さほど遠くない所

に水田を開いていました。水田などで使用した、くわ鍬やすき鋤などの木製農具や、木製のかい櫛などがムラの中や周辺から発見されています。また、それらの木製品を製作するためのいしおの石斧や稲穂を刈り取るための石包丁なども発見されています。

人々が死ぬと、溝で区画した方形周溝墓や、遺体の大きさをくらいに地面を掘りくぼめたどこうぼ土壇墓などに、手厚く葬った跡も発見されています。一方、水田を維持するために、水争いなどの戦いもあったようで、いしやり石槍や大型で戦闘用とみ

られるせきぞく石鏃も発見されています。

さて、中期の終わり頃になると、水田を開くには適していなかったような地にまで、人々がムラをつくり、進出した様子がわかります。その背景にかいこん開墾・かんが灌漑技術の進歩や、道具の改良、あるいは人口の増加が考えられます。そのようなムラに、西京区の松室遺跡（写真3）や右京区のと泉式部町遺跡などがあります。

後期になると、遺跡の範囲が広大な北区・左京区の植物園北遺跡や、山科区の中臣遺跡など地域の一大センター的なムラが出現したり、またムラの数も倍増するほどに増加し、市内全域で人々の生活の跡が残っています。やがてこの時代の終わり頃、前方後円墳に象徴される古墳が造られ、また一つ新しい京都の歴史が刻まれます。

（平方 幸雄）



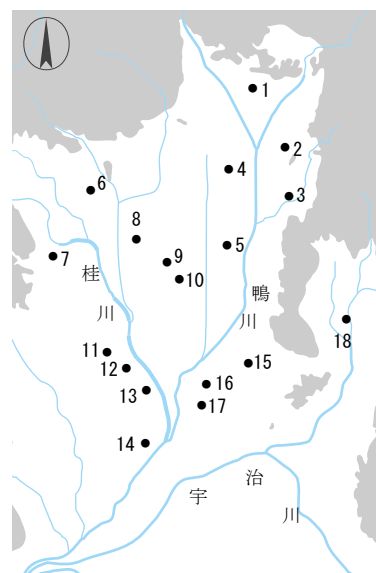
写真2 下鳥羽遺跡出土の土器

1～4は弥生土器、5・6は縄文土器の伝統を受け継ぐ土器。



写真3 松室遺跡（北から）

中期の終わり頃から新たに開拓されたムラ。1984年調査。



遺跡位置図 1 植物園北遺跡 2 京都大学構内弥生遺跡 3 岡崎遺跡 4 内膳町遺跡 5 烏丸綾小路遺跡 6 和泉式部町遺跡 7 松室遺跡 8 西京極遺跡 9 衣田町遺跡 10 唐橋遺跡 11 上久世遺跡 12 中久世遺跡 13 東土川遺跡 14 羽東師遺跡 15 深草遺跡 16 鳥羽遺跡 17 下鳥羽遺跡 18 中臣遺跡